

二十一年前の『ロシア記事』

志水 通男

平成二十六年（二〇一四年）三月三十一日、仕事中の私の携帯に突然、兵庫県生
活支援課「恩給援護班」の方から電話がかかってきた。父は二年前の平成二十四年
（二〇一二年）五月十四日に九十一歳で永眠し、母は一カ月前の三月一日に八十六
歳で亡くなったばかりなので、てっきり私は父の軍人恩給打ち切りの話だと思った。
ところが、係員の「外務省・厚生労働省を通じ、ロシアの女性から『六十八年前に
お父様からもらった写真を返したい』と連絡があった」との説明に、私はビックリ
仰天した。父から極寒の中での過酷な強制労働と食糧不足など悲惨なシベリア抑留
生活で辛酸を舐めた話はよく聞いていたが、ロシア人女性との交流については初耳
だったからである。

後日、厚生省から父が引揚船で書いた身上申告書の写しが届いた。その記録を
たどると、父・志水實一は、大正九年（一九二〇年）十一月八日兵庫県宍粟郡神戸
村の農家で七人兄弟の末っ子として生まれた。地元的高等小学校を卒業し、十九
歳の昭和十四年（一九三九年）十二月十日に志願兵として陸軍に入隊し、八カ月後
に満州の関東軍へ転属となった。そして昭和二十年（一九四五年）八月の二十四歳
の曹長のとき終戦を迎えた。その後、ソ連西部タンボフ州のマルシヤンスクとタン
ボフで二年間の抑留生活を送り、二十七歳直前の昭和二十二年（一九四七年）十月
二十八日に引揚船北鮮丸で京都府の舞鶴港へ帰ってきている。

兵庫県庁から電話があった二カ月後の六月三日に、ロシアから父の軍服姿の肖像
写真が六十八年ぶりに帰ってきた。肩の階級章を確認すると伍長なので二十一歳の
ときの写真のようだ。七十年も前のセピア色に変色した写真であるが、軍服姿の父
はとても凛々しく、なかなかの美男子であった。写真と一緒に封筒の中には、露日
協会タンボフ支部長フェドートフ・ヴァチエスラーフ氏の手紙と『ロシア記事』の
コピー一枚が同封されていた。

フェドートフ支部長の手紙は日本語で、

「お父様の写真を持っていたのは、一九四六年（昭和二十一年）当時十歳だった女

性で、名前はエルマコーヴァ・エミリヤさんです。彼女は、お父様とそのほかの日本の兵隊さんと交流して、とても温かい思い出を持っており、この写真は是非ご親族に渡してほしいと望んでいます。今年の秋にタンボフ市で日本大使館が協賛の第四回日本映画祭『もみじ』を開催するので来賓として参加してほしい」と書かれ、映画祭の招待状が入っていた。

『ロシア記事』には不鮮明な軍服姿の肖像写真が貼られていたが、それについてなんの説明もなかった。また、記事も馴染みのないロシア語のためチンプンカンプンで、それがいつ書かれたものか、どのような内容のものか、そのときは全く分かっていなかった。しかし、その後、知人に和訳をしていただき作成年月などを調べてもらうと二十一年前の一九九三年(平成五年)五月、タンボフ州の内務省公報「ダヴェーリエ(信頼)」二十九号に掲載されたエッセイ記事で、筆者は警察官僚のヴァシーリー・チエルヌイシヨフ氏と判明した。そして州都タンボフ市は、モスクワから南東四百六十キロに位置し、人口三十万(終戦時二十万)の地方都市であることもわかった。

記事は「優しさの記憶」というタイトルで、
制帽の星を見ると、読者の中にはこの若者が赤軍軍人であると取り違える人がいるかもしれない。彼は、実際に軍人である。ただ日本軍の軍人であり、シミズ・ジツイチという名前である。日本の敗戦のとき、ほかの兵士や将校達のように彼はロシアにやってきた。

との書き出しで始まっており、シミズ・ジツイチはまさしく私の父の名前であった。内容は、一九四六年(昭和二十一年)八月、タンボフ市で捕虜として道路工事をしていた私の父ら日本兵六人と十歳の小学生四人グループらとの交流を、四十七年後の一九九三年(平成五年)に内務省警察官僚の筆者が同僚のエミリヤさんから聞き取る形で紹介していた。エミリヤさんのその時の年齢は五十七歳で、内務省の医療衛生部人事担当官であった。

(『ロシア記事』 抜粋)

エルマコーヴァ・エミリヤ氏は今でもずっと、親切で日本の伝統にのっとり、礼儀正しく勤勉であったシミズ氏のことを覚えている。とはいっても、捕虜となっている彼とその仲間の兵隊の大部分がそのように親切で、礼儀正しく、勤勉であったと、彼女は思っている……。彼らは昼、休憩時にどこからともなく

家の中庭に現れ、一時間の休憩後どこかへ去って行った。その間、いつも彼らの周りをタンボフの少女達が取り囲んでいた……。子供達は両親達と同様に、日本人に対してなんら憎しみを抱いてはいなかった。それどころか同情さえ感じていた。飢餓の時代で配給制であったにもかかわらず、多くの人が砂糖のふりかかった薄切りのパンなどを捕虜達に持って行った……。日本人捕虜達は、抑圧され、虐げられた、と自分自身をそう感じていなかった。彼らは自信を持ち立派に振る舞っていた。このことは周りの人たちを引きつけた……。シミズ・ジツイチ氏が日本に帰れたと信じたい。何故なら彼は我々の地タンボフでいつも日本を思い出していたのだから。

もちろん私が、この二十一年前に書かれた『ロシア記事』を知ったのは今回が初めてである。終戦時のソ連といえば、今までシベリアでの悲惨な抑留生活の話しか知らなかった私は、当時抑留者の兵隊達が忌み嫌っていた内務省の警察官僚が、日本兵と小学生グループとの温かい交流を、ほのぼのとした描写で紹介している『ロシア記事』にとっても新鮮な感動を受けた。そして父たち日本兵が捕虜という身分であるにもかかわらず、日本人としての誇りを忘れない立派な振る舞いが多い人々の心を引き付けたことに、読んでいて思わず胸が熱くなった。それを筆者が戦勝者の驕りもなく、温かいまなざしで語っていたことに特に感銘を受け、私のロシアに対する悪しき偏見が一変した。また、過去ソ連で悲惨な抑留生活があったが、市民レベルでは抑留者たちを温かい目で見ていたことも初めて知った。この『ロシア記事』は、ソ連でペレストロイカ（政治改革）が始まり、一九九一年（平成三年）十二月二十五日のソビエト連邦崩壊から一年半後の記事であったので、内務省の警察官僚が書いた記事にもかかわらず比較的自由に書くことができたのだと思った。私は、この二十一年前の『ロシア記事』を読んで、ロシアへの興味が急に湧き上がり、当初迷っていたタンボフ行きを決めた。

そして私は、九月二日にモスクワへ飛び、四日のタンボフ市第四回日本映画祭「もみじ」に参加した。映画会場の歴史博物館前には、父の写真を大きく引き伸ばして貼り付けた、高さ一・七メートルもの看板が設置されていたことに驚いた。写真は、父の肖像写真と私が事前に露日協会のフェドートフ支部長へメールで送っていた両親の写真などであった。

映画上映前に会場ロビーで、七十八歳になったエミリヤさんと六十四歳の私との出会いのセレモニーが催された。その後、映画祭に参加していた日本大使館員の通訳でエミリヤさんから『ロシア記事』のエピソードなどを伺った。彼女が私の父と交流したのは、父が過酷な森林伐採で一年間過ごしたマルシヤンスクから南八十キロのタンボフへ来た直後の一九四六年（昭和二十一年）八月初旬から、わずか二週間だけであった。彼女が見た日本兵の印象は、親切で、礼儀正しく、勤勉な兵隊さんであった。出会うのは昼休みの一時間だけで、ジェスチャーと片言の英語とロシア語で交流を深めた。父達が別の現場へ行くため別れるときに、当時十歳のエミリヤさんは、二十五歳の父から肖像写真などを記念としてもらい、以後六十八年間、彼女は父の写真を大事に保管してくれていた。歳月が流れ、エミリヤさんは数年前から写真を返したいという想いからられて父を探していたそう。

今回、フェドートフ支部長の御尽力でやっと念願がかない、また、シミズ・ジツイチの長男の私とも出会い、満面の笑みを浮かべて喜んでくれた。彼女は私にとっても親しみを覚えたようで、映画と一緒に観たときずっと手を握っていてくれた。

映画は五十年前の東京オリピックのときの下町を描いた「always 三丁目の夕日64」で、ロシア語字幕の上映で笑い声も聞こえ観客の反応が良かったことも嬉しかった。

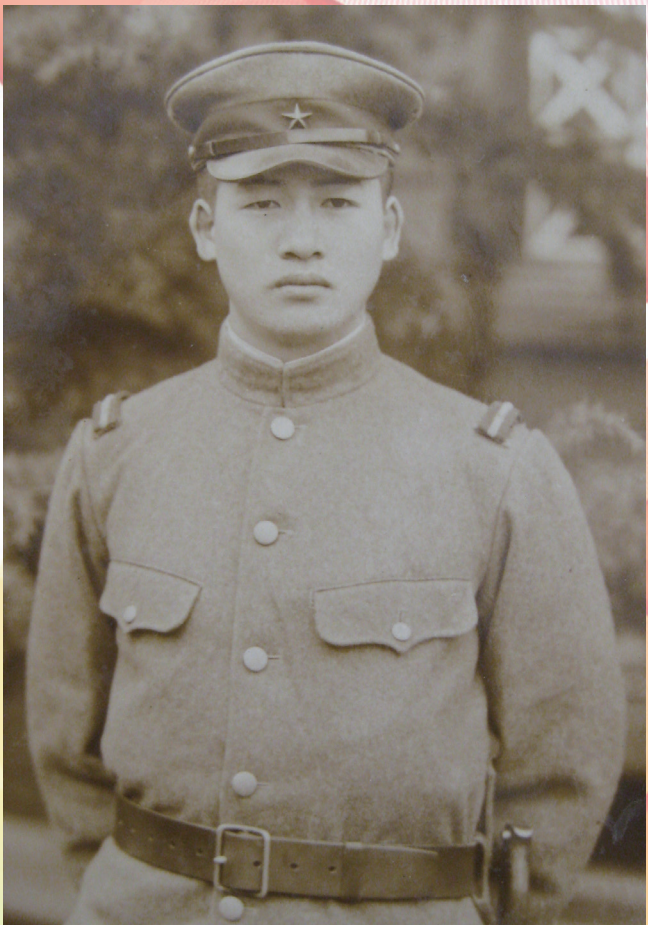
私はエミリヤさんに、気になっていた『ロシア記事』の筆者に会いたい旨お願いしてみたが、筆者は既に他界されていた。また彼女の御主人も亡くなられていた。

後で調べたら、ペレストロイカ時代のロシア人の平均寿命は男性五十九歳、女性七十五歳であった。男性の平均寿命が極端に短いのは、ウオツカの暴飲などの影響もあったが、ペレストロイカの変革できついストレスにさら晒され続けたのもその一因であったようだ。

エミリヤさんの温かな一途な想いから六十八年前の父の肖像写真が戻り、私は思いがけなくロシアへ行き大歓迎を受け地元新聞にも大きく取り上げられた。そして今回、ロシア人向けに書かれた二十一年前の『ロシア記事』で終戦時の隠れた歴史的一幕を知ることができ、これまで遠い存在だったロシアに私はとても親近感を覚えた。亡き父が導いた折角の縁なので、微力ながらロシアとの友好の懸け橋になることが私の今後の務めだと思った。

帰国後、自宅近くの神戸市外国語大学ロシア語学科の学生に翻訳ボランティアを依頼して、現在、エミリヤさんやフェドートフ支部長などと手紙とメールで交流を深めている。

二〇一五年度「文芸思潮」エッセイ賞入賞（奨励賞）作品



プロフィール

氏名 志水通男（シミズミチオ）

生年月日 昭和二十五年（一九五〇年）四月二十四日生

職業・経歴 会社員

平成二十三年（二〇一一年）三月定年退職

現在、自宅近くのショッピングセンター管理会社で
嘱託勤務